特定非営利活動法人　境を越えて

日本財団助成事業

特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握とネットワーク構築実施報告書

目次

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ.　調査報告

聞き取り調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

調査報告内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ.　活動報告

1. 会議録

第1回会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第2回会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第3回会議・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅳ.　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

Ⅰ．はじめに

　　重度障害当事者（難病患者含む）にとって介助者は地域で生きること、暮らすことに直結するキーパーソンと言える。一方で、社会一般からみてその介助者の専門性、個々の介助者のスタンスとスキルの違いは十分に周知されていない。当団体では2019年の設立当初より、特別なスタンスとスキルを持つ介助者が存在することを広く社会に知ってもらうため、また特別なスタンスとスキルを持つ介助者を育成するため、「特別なスタンスとスキルを持つ介助者の実態把握とネットワーク構築」を実施してきた。本報告では、ALSを中心に、仕事として重度障害者の介助を行ったことある人10名を対象に「介助経験を積んでいく中で困難事例と言われる当事者への介入~~経験~~の有無、またそれに対しての実際の現場対応やどう考えたか」の聞き取り調査を実施し、その後報告内容を有識者で意見交換し内容をまとめたものである。

**Ⅱ.　調査報告**

聞き取り調査概要

1. 日程：2023年4月〜5月
2. 方法：zoom11件

境を越えてからの調査協力依頼に応じていただいた介助者11名に対し、聞き取り調査を実施した。調査協力者は、ALSを中心として重度障害者の介助に仕事として関わった経験のある人とした。

調査報告内容

境を越えてからの調査協力依頼に応じていただいた介助者11名に対し、聞き取り調査を実施した。調査協力者は、ALSを中心に仕事として重度障害者の介助の経験を行ったことある人とした。現在も介助者として働いている人のほか、コーディネーターの仕事をしている人も含む。今年度は経験年数の長い人が多く、性別についても男性は2名のみで、女性に偏っている。居住地は東京近郊のほか、大阪、北海道などを含む。なお、調査協力者には、当団体規定に基づいた謝金が支払われている。

　聞き取り内容は日々の介助での経験を幅広く対象としたが、当団体および調査実施者（石島）の興味関心から、今年度は大きく以下の3点が中心的な話題となった。

（1）介助者との関係が悪化し、安定した在宅生活を営むことが難しくなっている、いわゆる困難事例とされる人への介助の経験

（2）その際に感じた難しさや対処方法

（3）困難事例とされる人に対応する自身の能力、適正

　調査はすべてオンライン通話を用いて実施し、1回の聞き取りは平均して1時間程度であった。聞き取りは協力者の同意の上で録音し、文字起こしをして分析に用いた。また、昨年度の調査のデータについても分析に際して適宜参照された。

結果と考察

（1）介入のタイミング

　困難事例と呼ばれる事例への遭遇経験は介助者によって異なる。これは実際にそうした事例に直面した経験の有無が分かれる可能性もあるだろうし、同じ事例だったとしても介助者によって受け取り方が異なっている可能性もある。そうした事例への対処・介入については、なんとか信頼関係を結び直すことができた場合、利用者と介助者と一度徹底的に腹を割って話し合う機会が設けられる様子がしばしば語られた。しかし、すべての事例でそうした話し合いの機会にたどり着くことができるとは限らないと思われ、状況の改善に至らなかった事例についても語られた。

　一方、状況の改善可否に関わる要素としては、ある程度共通して介入のタイミングが挙げられていた。介入が比較的早期であれば、利用者と最初から良好な関係性を築くための試行錯誤をしやすく、とくに介助者を利用する生活に不慣れである人に対して、介助者に対して利用者として要求できる範囲や、介助者の労働者としての尊重といった考え方を伝えることができる。対して、介助者との関係がすでにこじれてしまった段階で、撤退した事業所の代わりに入るときなどでは、フラットな状態から良好な関係を築くのに比べ、まず話し合いができるところまで状況を回復させるのに労力を要する。その意味で、一番最初に利用する事業所および、福祉サービスの利用開始に関わる専門職の役割は、その後に長く影響する重要なものであると言える。

（2）対人関係を構築する素質

　利用者との人間関係を築けるかについても、いくつかの類型化ができた。まず、介助者の関係構築を比較的得意と捉えている介助者がいる。たしかに、介助者の中には生来の性格ゆえに人間関係を構築することに長けているように思われる人がいる。そうした介助者は、凝り固まった利用者とうまく打ち解け、事態を改善させることができるようである。

　一方、そのような自負のない介助者が優れていないというわけではない。介助者はそれぞれの利用者の個別性に対応する介助を実地で身につけていくなかで、特定のやり方に固執せず、それぞれの事例に合わせて介助の方法を都度考える謙虚さを身に着けていく。それは結果として、自身の介助や素質に対する自信や仕事のやりがいに繋がっている様子も見られた。こうした個人に応じた介助が、利用者の快適さにつながり、ひいては利用者と介助者の人間関係の構築・改善に資する場合もあるだろう。

今後の課題

　今回の調査からは、困難事例に効果的に対処するために解決すべきいくつかの課題が示唆された。まず、困難事例とされる状態に至る前の段階で、利用者と介助者の適切な信頼関係を築けるように介入することが挙げられる。当法人では介助体制の構築に向けたコーディネートの業務を行っているが、こうした活動の認知度を上げるとともに「のれん分け」によって同様の取り組みを行える人々を増やし、早い段階で良好な関係を軌道に載せられるようにすることが求められる。

　また、一度こじれて関係をふたたび立て直す際には、現状では利用者と腹を割って話し合うことのできる、あるいはそうした話し合いの場にそもそも持ち込むための介助者個人のコミュニケーション能力が頼りになってしまっている。その能力の内実を明らかにし、属人性の低い方法を開発することが必要である。

●成果物

本調査のデータの一部は、以下の論文で分析されている。

石島健太郎，2024近刊，「素質に気づく、素質を教える――よりよい介助者を増やせる社会に向けて」伊藤智樹編『支える側・支えられる側の社会学――難病患者，精神障害者，犯罪・非行経験者，小児科医，介助者の語りから』晃洋書房，102-124．

Ⅲ．活動報告

第1回会議

1. 概要

日　付：2023年8月25日

方　法：zoom

参加者：山田康子、彦田友香、川崎彩恵、清水仁美、永山弥生、三浦遥、江口健司、石島健太郎、岡部宏生、本間里美、櫻井こずえ

内容要旨

　　　　・調査報告内容に対する意見交換

詳細内容

テーマ：困難事例の類型化と対処　　※情動制止困難に限らない困難事例をどう考えるか

山田）より難しさを感じた。自分は割り切って入っているが言えない人もいる。

江口）「ケンカをする必要性」について定義、研究されるものがあるんだと初めて知った。その必要性は自分も思ってはいる。それと、利用者と介助者のやりとりの中で、家族の形、関係性、ルールでの難しさを改めて思った。「適切なコミュニケーションで解決すること」について自分もそれはあると思う。伝わらないストレス、わかっているつもりだが本人にとってはそれ以上のものなんだと思う。情動制止困難に直接かかわっているかわからないけど影響していると思う。

石島）患者のフラストレーション。ALSは過酷な病気。伝わらないということはフラストレーションの大きな割合を占めると思う。今回は介助者への調査だったが。

清水）難しい問題だと改めて思った。自分もいくつか困難事例を経験した。当事者にも家族にもなんとか在宅継続のためのアプローチをするが、入っていかなかったり聞いているようで響いていなかったり。あまり言いすぎるとシャットアウトされてしまう。そういう面でのコミュニケーションも難しい。それが続くとこちらもつらくなってしまう。要求の不在、過剰、両方あるかな。当事者や家族に「なんとかしたい」という気持ちがないとはじかれてしまう気がする。

清水）そんな感じ。

石島）Futureはないけど日々の細かい要求は多い、というのはよくわかる。生活介入プロジェクトで入っている方はどこから依頼がある？診断から何年？

櫻井）直近4件

石島）4件中3件は本人の意思があり。本人が困る、どうにかしなきゃと思うこと。

彦田）腹を割って話すというのは自分の性格ではできない。利用者さんがそう言えばそれでいこうと思う。でも、自分はストレス耐性が強いタイプ。ALSに限らず、生活が安定しているおうちに入ることが多い。そういうところは利用者さんがしっかりしている。でもその陰で家族が我慢しているように感じる。あきらめ。やりたい人・あきらめる人・サポ―トする人、の3者がいて安定しているのか。

清水）最低限のコミュニケーションしかできない方のおうち。家族は自分たちが楽をする、休むために介助者が入っていると認識している。対介助者、対医療者でバチバチすることが多い。

山田）家族が介助者になってはいけないのは大原則。ケアが必要な人に介助者が入ることで家族がもとの家族に戻る。なのに、家族にとって不都合な人や事業所を切っていく。

川崎）うるさい家族、と言っても、家族が自分の生活を楽にさせるためにうるさくする場合と、当事者の生活をよくするためにうるさくする場合がある。その見極めをしないといけない。仙人はそれをキャッチしているんだと思う。うるさいけどこうするために言っていると思うからやってくれ、と言ってくれる人がいれば理解できる介助者はいるかも。

石島）腑に落ちる話。介護の社会化。介入がなんのためなのかを家族も理解をすること。介入時にフロントに出るのはサ責とかだと思うが。

山田）保健師や地域包括、訪看など初期のうちに関係ができている方からフィードバックしてもらうと話が入りやすい。清水さんの事例には自分も入っている。管理者である自分に話すことと、いちヘルパーである清水さんに話す内容のちがい。「変な人が入ってきたからやめてもらった」。「私たちが悪いって言われるのよね」「自分たちは被害者だ」と。「支援者を大事にして」という保健師からの話は入っているがそういう認識になっている。

本間）保健師らが問題の本質をわかっていない場合はある？「ヘルパーさん来たから楽してね～」などと。

山田）ある。

彦田）家族のために自分が入っているとも思ってる。家族の被害者意識も理解はできる。バランスが難しい。

江口）家族が「あのヘルパーさん、ちゃんと見てくれてない気がする」と。でも、介助者がいることで当事者が安心して生活しているのをわかっている。その絶妙なバランス。

櫻井）生活力向上講座の生活力はチーム力応用編を皆さんに見てもらいたい。

本間）初期というのは発症初期なのかチーム作りの初期なのか

石島）区別はしていなかったが、それらにはけっこうラグがある。発症初期から介助者のことや育成のことを考えるのは酷だとは思うが、介助者のことだけでなくて制度のことやいろいろな生き方を知っておくことは必要だとは思う。

本間）CILのプログラムではALSの場合には難しい。幼少期発症と、中途発症。

石島）その違いはある。

本間）必要な情報も違う。ALSのプログラムがあるなら、家族も最初から一緒に学ばないと。

川崎）介護保険のほうから入ることにも問題がある気がする。市がわかってくれないし、おばちゃんがわーっと掃除して帰っていく。そこで被害者意識が最初に入ってしまうし、支援者をそういう目で見てしまうようになる。そういった違いもあるかも。

山田）それは確かにあると思う。さっきの事例は、そこを乗り越えてもなお。介助者は家族のために派遣されていると認識している事例。介護保険は使えない制度で、縛りが強くてヘルパーもやってあげたくてもできない。高齢と障害の違い。役所はそれを言わないから、それを説明してくれる人に出会えるかどうか。

本間）困難事例になってから介入する場合もある。暴言がひどい当事者に入った新人男性ヘルパー。事業所は彼以外を派遣しないと言った。今は彼がいないとだめだ、と信頼している。彼が辞めると言ったとき「辞めるならどこが嫌かを言ってくれ」とのことで大喧嘩して当事者が彼に対してだけは考えを改めた。

清水）彼が自分の人生を大事にしての選択ならいいし、彼が辞めたときに困ればいいと思う。

彦田）全然定着しなかったのに今はすっかり定着なおうち。学生を自分で集めて育て始めたら、大事にして柔らかくなった。私が連れて行ったときは拒否だった。知らなかったからなのか。生活が安定してきて、外に出たり講演したりするようになり、外の情報が得られるようになったんだと思う。感情コントロールが効かないのは今もあると思うが。情動制止困難は否定している。

三浦）利用者さんでの困難はない。たまたまなのか地域柄かはわからないけど。介護保険と重訪。やっちゃいけない縛り。事業所ごとのちがい。事業所が複数入ると足並みをそろえて、カフアシストはやらないでと言われる。そうすると体の状態も悪くなっていく。救われるものも救えない。

江口）できないところに合わせよう、と号令するのはやめてほしい。事業所ごとに都合があるのはわかるけど、できるところにやめさせるのは違う。できるときにやったり、医療職に助けを求めたりすればいい。医師の判断も大きい。自分たちはできないほうには合わせない。

三浦）自分たちが先に入っていて、医療職も必要性を説明してくれていたが、あとからきた介護事業所が。

山田）今、呼吸器装着前の方に入っている。呼吸リハ、ＰＴＯＴのフォローの重要性。地方はそういう情報も少ないと思うから境として食い込んでいけるといいかなと思う。情動制止困難もだが。

本間）仙人とあわせて生活力向上講座も。

山田）講座もだが、在宅のいち個人に入っていってほしい。

本間）講座講師が現地に行くこともあるが、訪看でもないし、というところで難しさもある。

第2回会議

1. 概要

日　付：2023年　12月　25日

方　法：zoom

参加者：山田康子、川崎彩恵、本間里美、櫻井こずえ

1. 内容要旨

来年度に向けたコアメンバー打ち合わせ

1. 詳細内容

1．定期 MTG について

・2024.3 までの間に 1 回開催

・2024 年度は 3 回/年の開催を目指す

 －メンバーに参加しやすい曜日、時間を再調査

2．テーマ案

石島論文を深堀－内容からのピックアップ

－【介助者 が、自分の素質を十分に発見しうる機会が確保されていること】が大事という点。その為に

は介助者 が別の助者 と比べて自分の長所を自覚すること】が必要という点。よって介助者 同士の

横のつながりが重要であるということ】等について意見交換

3．お困り助者 をゲストに招いての仙人の考え方エピソードを話す

－CIL の助者 からの相談で個人情報と言われ相談先が無い辛さ、介助者が増えないのではないかという

不安をもつ CIL 健常 職員が増えている

いつでも繋がれるコミュニティの場を作る

4．グランドルールを決めた上で、助者 の困った悩みを気軽に相談できる場所を作る

 －彩恵さんが管理 として運営、ここから仙人会でのテーマがあがるかも

 －必要ではあるが助者 だけというところでルール化が絶対必要、当事 として

－境理事の当事 に入ってもらうなどの工夫

5．本ネットワークをもっと広く知ってもらえる工夫

 １）軽めの動画作成で見やすい工夫

 ２）チラシ等手渡しで仙人会が伝わる工夫

 －デザイナーに相談可

 －イベントが多くなっているので広められる

6．個別エピソード集作成

当時者、介助者の関係性構築をする上での個別具体的な内容が書いてあるエピソード集の作成

7．その他

・仙人育成について

－現場の介助者をどう育てるか？これがまずは大事である。

－山田さんと清藤さんの対談

・三浦さんの仕事動画を撮影

－仙人で共有しながら話し合う

第3回会議

* 1. 概要

日　時：2024年3月2日(土)21:00～22:30

参加者：山田、江口、三浦、川崎、石島、岡部、本間、櫻井

②内容要旨

今年度の活動振り返りと来年度に向けた打ち合わせ

* 1. 詳細内容

今年度は、コロナ化の影響が長引き介助者間での交換留学の実施ができなかった。一方で、相談件数は多岐にわたり介助者が相談先を欲している現状がある。来年度の活動内容を具体的に検討していきたい。

1．コア向け相談会の開催

本間）

・今年度は意見交換会が2回しかできなかった。一方で相談件数はよりデリケートで公にしにくいこ

とが多い状況である。

・Bar境（当団体で実施している会員向け交流サイト）には誘うが、当事者がいることもあり悩み相談などはあまりできないという意見もある。

・個別相談にしっかりと乗っていく形を日程を設定して行い、本チームメンバーで対応できる参加者に対応してもらうのはどうか。

清水）

・いいと思う

・Barは当事者もいるし、人数も多くなっているから話しきれない

・がっつり話せる場があるのはいい

三浦）

・いいと思う

・どう思われるか気にする人もいるから

・今日この人に出てほしいと選んでもらうのもいい

・解決できないとだし

本間）

・悪口の場になってしまう恐れも懸念されていたが、真摯に対応できる皆さんがいるからこそできる

・CILのコーディネーターから、当事者のことは相談してはいけないという守秘義務が介助者同士にもある。でもそれだともう限界かもしれないと悩まれていた。

山田）

・ニーズはあると思う

●決定事項

・外向けにはせず、相談があったときに対応できるシステムとする。

・日程は決めずに相談者の都合で設定し、メンバーに呼びかける

2．いつでも繋がれるコミュニティーの作成について

本間）

・1はよりコアに、こちらは広く繋がれる場づくり

川崎）

・スラックで繋がれるコミュニティー作りを提案したい

・3か月で消えるのも良い面と捉えている。

・テーマごとに部屋を作れる

・使ってみたら慣れるのではという肌感

・仲間に入りたい人を入れられる、誰にでもオープンではない

・グランドルールを作る重要性

・何もやらないよりかはやってみるのもいいのかなと

・管理人は必要だと思っていて、それは自分がやれると思う

江口）

・仕組みについてはやってみないとわからない

・慣れるまでは、変な方向にいかないように管理していかないと。それが大変そう。

・目的を常に全員に提示すること

・前向きにがんばっている人の集まりであれば愚痴であってもいいけど、愚痴でおわらないで、こう考えてみようよとかに向かっていく

・一対一だし、ちがう事業所の人に聞く機会もないし

三浦）

・目的、悩める人を救うだからいろんなツールがあってもいい（自分がついていけるかわからないけど）

・若い人にはハマるのかも

清水）

・やってみなとなんとも言えないけど

・これは匿名？

川崎）

・名前の登録は自由だけど、掲示板ではなくて、誰がこのコミュニティにいるかを把握しながらできることを想定していた

・集まったものは個別エピソード集につながるものになると思った

本間）

・アドバイスはうちらだけなのか参加者もなのか

川崎）

・だれでもできるけど、部屋のテーマを決めてもいいと思う

・グループLINEのイメージに近い

山田）

・いいと思うし、重訪の事業所がすごく増えていて、介助者を急激に増やしているところもある。介助者のフォローができていない。週5日受け持っていたのに週1日になってしまった。

・そこの介助者から相談された。サ責が相談に乗ってくれないと。そういった方に参加してもらいたい。

●決定事項

　・川崎が中心となりスラックを作成

3.特別なスタンスとスキルを持つ介助者の会の定期開催

本メンバーを増やしていく位置づけとしてゲストを交えながら実施していく。

●決定事故う

・7月、12月、3月で調整する。

4．交換留学

介助者同時が互いに学ぶ時間として今年度のリベンジで実施する。その後、双方が自らの介助経験や育成に与える影響を調査していく。

山田）

・やりたいよねでも…コロナがね。

江口）

・日程がまず難しい

・拘束時間が短くてもできる方法として、議題1にもつながるが、よりよいケアをしたいのにどうしたらいいかわからないというチームにメンバーがが行って、自分ならこうする、という助言を伝える。

のはどうだろう？元の目的とはちがうけど。同じケアでもやり方は皆さん違うと思う

山田）

・それもひとつの形かなと思う。

三浦）

・メンバー同士で見たいのもあるけど、悩める方のところに行くのもいい

・利用者さんの承諾とかも必要になってくると思うけど

江口）

・悩みを文章で聞くのと、現地で見るのとでは言えることが違う

清水）

・私も交換留学したいけど、その案もいいと思う

本間）

・江口案だと、1の現地対応にもなりますね

・後輩育成していて、自分以外の介助者の話も聞いてみてとかある？

江口）

・いろんな介助者と組むようにあえてすることはある

・伺った仙人も学びがあると思う

山田）

・ケア自体を交換すると感染防止のハードルが高いから、見学に行くイメージならできるのかな

本間）

・見学だけでも変わるのかというのは石島さんは気になるところ？

石島）

・見るだけだと私は思っていた。利用者さんの許可もあるので。

・見るだけでも違うと思っている

山田）

・見学したあとに文章化して共有すると、その人の視点や気づきが知れるし、自分と対比できる。

・ハードルを下げてやってみましょう

●決定事項

　互いの介助をリアルで見学することをメインに実施していく。

5．個別エピソード集

4年間、本プロジェクトを実施して見えてきたものととして育成マニュアルではなく、個別事例集の蓄積の必要性が明確になっている。

山田）

・来年度実施する他の内容とも絡んでくるので、作れるのではないか。それで作っていけると思う

・困難事例うんぬんじゃないですよね

本間）

・みんなでこのようにざっくばらんに話していることが事例にも蓄積していく。

6．特別なスタンスをスキルを持つ介助者の会を知ってもらうチラシや動画作成

櫻井）

・介助者のつながりの場があるということを知ってもらいたい

・現在仙人はウェブ上にしかないため、広報できるものがほしい

●決定事項

　各プロジェクトと絡めながら早急に作成していく

7．調査報告について

石島）

・回覧した内容を読んでいただければ。仙人とされる方がどうしてそうなったのか、後輩をどう育成しているのかを聞いた。来月に出せるかなと思っている。引用させてもらった方と境に送る。

・素質、または訓練でそうなった。素質なんて関係ない、素質がなきゃだめだ、になると困ってしまう。

・素質を図る方向には持っていっていない

・人々が何を考えているのか、介助者としての肩書がどう培われてきたのか、という視点にしている

・どう捉えてもうまくいくようになっているというオチにしている。

・困難事例という件については今月報告書としてまとめる。

・なるべく早い段階での介入をしたいというのは一致しているなと

江口）

・どちらかに決められないこと

・どうやっているか、向き合い方が素質にも訓練にも関わってくる

川崎）

・自分の素質を発見し得る機会が確保されていること

・他の介助者と比べて自分の長所を発見する

・だから横のつながりが必要

・そこからスラックなどの案を出した

石島）

・その辺りは今のメンバーを意識してを意識して

・スラックなど介助者にも活用していけるかもしれない

・自分は仙人会みたいな、元々知っている人同士での集まりを想定していたが。実地を知らないと話が進まないかなというのもあり。

山田）

・つながりがなかなか難しい

・守秘義務があるため、話がしにくい

・スラックは3か月で消えてしまうそうで、残らないことが逆に利点なのかもしれないという話もあった

8．近況等（本人名等公表できない状況については削除）

江口）

・先日、現職者向けのカリプロがあった。同じような話を難病連の講習会でした。

・事例検討もしたが、反応がとてもはやいため、数を増やして沢山話したい

・こちらの勉強にもなる

・事例検討の効果を実感した

清水）

・ショックだったのが11、2年入っている方に「お前は文字盤読めないからだめ」と。10年以上読んでるのに

・ALSで高齢。認知症入ってきたのと、元々鬱症状。機能が落ちてきてケアの拒否が出てきた。他の事業所の仲介しようとしたら言われた

三浦）

・「私も読めるので読ませてください」と言った場面があった

・普段入っている人に読んでもらいたいのもあるだろうけどいろいろ考えちゃった

・暖房をつけてもらえないおうちもあるから、ユニクロのフリースに友人に刺繍してもらった

・現場と管理業務の両立に悩んでいる。皆さんどうやっているんだろう。クオリティが下がっているのでは、と心配になってしまう。

山田）

・介護保険も？

三浦）

・重訪メインで、その方が介護保険やっていれば。介護保険のみは断っている

山田）

・自分が働いていれば回る、なんとかなると思っていた

・先輩に「現場に入りすぎ。あなたががちがちにやっていたら後輩が休めない」と言われた

・休みの穴に入れるような余裕を持たないといけないと思っている

・週2回は現場無しにしている

・完全オフはまったくなくて、なんだかんだ事務所にいる

・現場おわってから、事務仕事している感じ

・自分が処理できる範囲でしか事業はしていない

・介助者が増えても質が下がるようであれば信頼もなくなってしまう

・小さい小さい事業所だけどそれでいいのかなと

三浦）

・質の高いサービス提供を、というのが事業所作った目的

・目的を見失ってしまう

・新規もかわいそうだなと思って受けてしまう

・日中はあけて自分が動けるようにするけど、自分の替えはない

山田）

・理想としているものを具現化するのは介助者さん。

・その宝物をどう大切にしていけるか

・おのずと伝わっていく

三浦）

・同じ立場の人にしか言えない

・現場出ないなら出ないで、出なよと思われるのかなとか

・現場が大好きなので、いいものが提供できるようにやっていきたい

・現場の人って事務系苦手？茨城だから？

・スタッフ5名から10名に増えた

・相談乗ってもらえないとかでうちに来てくれた人もいる

川崎）

・自分にも社員さんにも納得感を大事にしているんだなと思った

山田）

・来年度も、全員出席は難しいけど、よろしくお願いします

Ⅲ．まとめ

特別なスタンスとスキルを持つ介助者をどのようにしたら広く一般に知ってもらい、またその介助者を育成することができるのか？これは、本プロジェクトを設立した当初から変わらない目標であった。重度障害当事者らにとって、「特別なスタンスとスキルを持つ介助者」は明白である一方、それにあたる介助者らは、自身の介助が特別なスタンスとスキルがあるとは思っておらず（介助者らにとっては誰でもできる当たり前の事をしているまで）という状況からスタートし、介助者自らが語り合いをベースに自分たちの介助のスタンスやスキルを表現していき、それを分析していった。一昨年までの実績によって特別なスタンスとスキルを持った介助者の共通点は明示され、今年度は育成にも焦点をあてたマニュアル作成も視野にいれていた。しかし、調査、話し合いを繰り返すうちに現場育成に必要であるのは、マニュアルの前に、個別事例の蓄積であることが明確になった。介助者不足は社会一般的にも重要な課題である一方、「介助の質の確保」は課題にはなっていない。重度障がい当事者が地域で安心して暮らせるしくみの根本には、「介助の質の確保」が大切であることを本プロジェクトでは今後も発信していきたいと考えている。